Not Mines But Flowers
地雷ではなく花をください

「これまで そして これからの歩み」

中村　明子

目　　次

はじめに

生い立ち（１９７２年～２００８年）

赤井川塾の設立（２００９年～２０１０年）

赤井川村議会議員生活のはじまり（２０１１年～現在）

赤井川村政について（現在～未来）

抱負（未来）

おわりに

はじめに

　私は、思春期の頃から「命」について考えることが多かったような気がいたします。それは、私が１７歳のときに、４歳年上の姉が遺書も残さずに自死したことと密接に関係していると思われます。それからというもの、私は「姉の命を救ってあげられなかった」という重たい十字架を背負うこととなり、今日に至っております。姉が亡くなってから４年後に、今度は父が病死いたしました。５３歳の若さでした。父は、姉が亡くなったストレスから自らの命をも縮めたのだと、私は確信しております。その後、私は２４歳で結婚し、３人の子宝にも恵まれました。そして、気付けば４０歳の誕生日を迎えることとなりました。これまでの半生を振り返りますと、前半では愛する家族をつぎつぎと失い、後半では愛すべき家族がつぎつぎと増えていった、そんな歩みでありました。人は皆、そのように出会いと別れを繰り返しながら人生を紡いでゆくのですね。私も、これからの後半生においても、大切な人との出会いや別れを繰り返してゆくのでしょう。そんな目まぐるしい人生のまっただなかで、私はふと立ち止まってみたくなったのです。これまでお世話になった方々に、私は自らの生い立ちについて、あまり語ってこなかったように思われます。ですから、あらためて言葉にして半生を語ってみたくなり、それをエッセーにまとめて親しい方々にお読み頂ければ、と思ったのです。しかしながら、中身のない人間ゆえに、本当に貧しい内容となってしまうことを、はじめに申し上げておかなければなりません。そのような人間ではありますが、この世に生

まれてこられたのですから、少しでも人様のお役に立たなければと思っております。近年、乳幼児の虐待による死亡や、小・中学生のいじめを苦にした自殺など、痛ましい出来事を多く耳にします。我が国の自殺者も、年間３万人を超えているそうです。私は、そうしたニュースを耳にするたびに、姉を亡くした遺族として、何かしなければという焦燥感にかられています。私は、このエッセーを、今は天国におります姉と父に、そして悲しい気持ちを抱えて亡くなっていった虐待やいじめの犠牲者となった子どもたちに捧げます。そして、こうした犠牲者をこれ以上増やさないために、希望ある明日を築くために、微力ながら我が国の未来のために奉仕してゆくことを天に誓います。

２０１４年　吉日

中　村　明　子

生い立ち（１９７２～２００８年）

私は、自らの半生を親しい方々にすら語ってこなかったと、「はじめに」でも申し上げたところです。そのために、まずは私自身について記しておきます。

私は、１９７２年に神奈川県横浜市の新興住宅地にある一軒家で、会社員の父と専業主婦の母のもとに生まれました。４歳年上の姉も含めた４人家族のもとで、ごく平凡に育てられたように思います。そんな平凡ながらも幸せな生活が足下から崩れていったのは、私が１７歳のときでした。姉が、遺書も残さずに、自ら命を絶ったのです。その当時、私は横浜の山の手にあります女子高に通っておりました。２年生の三学期を迎えたところで、確か１月だったと思います。私は、あまりのショックからか、当時の記憶で曖昧なところがあります。それは、もしかしたら、悲しみに耐えられない自分自身を守る術として、記憶を喪失するという行為を本能的にとっていたためかもしれません。しかしながら、姉の存在は私の深層心理に眠っており、現在の私自身を形成している「原体験」や「原風景」は、姉が亡くなった記憶に起因しているようです。そして、これは本当に不思議なのですが、姉が亡くなったことは言葉にはできないような悲しみであるにも関わらず、現在の私が社会で少しでもお役に立てるようになりたいと考え、そして行動する「原動力」になっているのも事実なのです。ですから、私は彼女の妹としてこの世に生まれてきたことは「運命」であると感じ、そして彼女がこの世を去ったことも「宿命」であったと受けとめております。私は、そうした

運命や宿命にあらがうことなく、そこから「使命」を自覚し、社会のために奉仕することこそが役割なのだと確信しております。極端に申し上げますと、そうした使命を果たさなければ、私は天寿をまっとうできない気持ちでおります。ですから、４０歳にして、いよいよ「惑わず」に実践してゆかなければならないと、気持ちを新たにしているところです。

さて、姉の死後の話に戻ります。私は学校にいて、昼食の時間に入ったところでした。クラスメートとお弁当を食べようと談笑していると、突然、担任の先生が物凄い形相で教室に入ってきました。そして、

「Ｉの家族に事故があったから今すぐ家に帰るように！」

と、叫んだのでした。私は、慌ててお弁当を鞄にしまいこみ、そして１人で電車に飛び乗りました。何があったのかは知らされていなかったはずなのに、私は家族に何があったのかをすべて分かってしまったのでした。そのために、車窓から景色を眺めるふりをしながら、涙がとめどなくあふれてくるのを必死でごまかそうとしておりました。そして、できることならこのまま２度と家に帰りたくない、家で起きてしまった現実に向きあうことなく一生を過ごしてゆきたい、そんな気持ちでいっぱいになりました。足取りは重く、心は沈みきっておりました。それでも、父と母のために、私は自宅へと向かうしかありませんでした。

帰宅すると、会社にいるはずの父も家にいて、１階の居間には姉が眠るように横たわっておりました。父は、私を見るなり絶叫しました。

「姉ちゃんが、死んだよ！」

私は、姉のあまりの親不幸を目のあたりにして、怒りに打ち震えておりました。姉の死に対しては、今だに複雑な心境を抱えたままです。私が彼女を助けてあげることができなかったという「悔恨」、何という親不孝をしてくれたのだという「憤慨」、なぜ妹の私を残して自分だけ先に逝ってしまったのかという「虚無」など、一言では表現しつくせない感情がないまぜになっており、それは今でも混沌としたままです。私はきっとこの重荷を生涯背負いつづけてゆかなければならないのだと、もはや諦観しております。しかし最近では、人は皆、何かしらの重たい荷物の１つや２つは背負っているのだという思いにも至っております。その内容は十人十色だと思いますが、私の場合は、なぜか「姉」にまつわることがいつも心を占拠しており、思考や実践の中核になっているようです。

姉は、自宅近くの高層マンションの屋上から飛び降りたそうです。現場には、父と母のみが姉を迎えにゆきました。それは、父母なりの私への配慮だったように思われます。姉が飛び降りた先は芝生の上だったために彼女は無傷ですみ、そのために息をひきとった後もまるで眠っているかのように美しいままで、私には彼女が亡くなっていることが信じられませんでした。おそらく、姉の恋人のＯさんも、同じお気持ちでしたでしょう。Ｏさんは、姉より１０歳年上で、千葉県在住の方でした。私は、Ｏさんのことは、姉からしばしば聞かされておりましたが、お会いすることとなったのは姉が亡くなってからとなってしまいました。その当時は携帯電話が普及しておらず、恋人同士も家の電話でやりとりするのが一般的でした。姉が亡くなった日の晩に、Ｏさんは家に電話をかけてきました。

「Ｃさんはいらっしゃいますか？」

Ｏさんは受話器を取った母に、そう尋ねたようでした。
「Ｃは、おりません。今朝がた亡くなりました。」
母は、そのようなことをＯさんに申し上げたと記憶しております。Ｏさんは大変混乱されたようで、その晩は一睡もできなかったそうです。そのため、Ｏさんは自宅近くの神社で一晩中「お百度参り」を裸足でしたそうです。翌朝になって家にいらしたときには憔悴しきったご様子で、妹として本当に情けない気持ちでいっぱいになりました。私は、妹として姉にできるであろう最後の務めとして、Ｏさんに対して精一杯のおもてなしを致しました。姉の幼い頃からのアルバムを出してきて説明しながら見ていただいたり、彼女の身につけていた物を取り出してきて遺品として差し上げたり、思いつく限りのことを必死で行いました。そんなことをしている間に、お通夜だのお葬式だので、たくさんの方々が姉を偲んで弔問してくださいました。有難いことではありましたが、私は精神的に極限まで追いつめられておりましたので、何も考えることなくひたすら機械的に頭をさげつづけていたような気がいたします。
姉は、亡くなったときはピアノ講師をしておりました。そのために、両親やピアノの恩師のはからいから、姉の葬儀は音楽葬というスタイルで行われました。美しいピアノ曲が流れるなか、姉の同級生にあたるうら若き女性たちが参列する様子は、どことなく優雅ですらありました。そのために、不謹慎ではありますが、葬式というよりは結婚式のようですらありました。でも、それもそのはずでしょう。父母としては、娘を華やかに送ってあげたいという親心もあったのでしょう。悲しいかな、そんな葬儀でありました。
お通夜やお葬式、告別式はあっという間にとりおこなわれてゆき

ました。私は、まるで映画のワンシーンを眺めるかのように、どこか傍観者のような気分でおりました。しかし、それからが地獄でした。私は、姉亡き後に寂しくとり残されてしまった我が家において、まるでピエロのごとく明るく振る舞おうとしたのです。あまりに意気消沈してしまった両親を前に、私は自分がどうにかしなければ我が家は滅亡してしまうことを悟り、そして必死で両親を励まそうとしたのです。しかし、本当に悲しかったのは、妹である私でもあったのです。ですから、私は一生懸命に両親を励まそうとすればするほど、神経をすり減らしてゆくこととなりました。その当時、私は家で泣くこともできなかったために、学校などの帰り道に、暗い夜道を歩きながら１人で声も出さずに涙を流しておりました。そして、家に帰るまでには涙をふいて、笑顔で帰宅するような日々でした。そうして、私はしだいに精神のバランスを崩してゆき、とうとう学校でも笑顔で過ごすことができなくなっておりました。ある日、数学の授業がはじまる前に、私はひとりで廊下にすわりこんでしまいました。そして、

「人は、何のために生きているのだろう」

そんなことを考え、その問いから抜け出せずにおりました。１人で廊下にしゃがみこんで泣いている私に向かって、数学の教師はやさしく微笑みかけ、そして教室に入るようにうながしました。そのとき、友人のＳさんが私に話しかけてきました。彼女は悩む私にこう言いました。

「人が何のために生きているかなんて、そんなことを考えるなんて、考えすぎなんじゃないの」

私は、彼女の台詞を耳にしたときに、生まれてはじめて自分自身が

「弱者」の立場に立たされているような気持ちになりました。姉が亡くなるまでの私は、いかにもお気楽で、何の苦労もなく生きてこられたのかもしれません。もちろん、人並みに悩んだり傷ついたりすることもありましたが、楽しそうにする同世代からはてしなく遠くにいるような疎外感を抱いたのは、おそらくこのときがはじめてだったような気がいたします。私は、ほどなく高校からフェードアウトしてゆきました。高校３年生の１学期のことでした。担任もクラスメートも心配しているから学校においでと電話をくれましたが、私の心はまるで氷のように凍てついておりましたので、すべての言葉をシャットアウトして１人で殻に閉じこもっておりました。お願いだからそっとしておいて欲しい、それが私の正直な気持ちでした。そして、私の過去など誰も知らないような環境に身をおいて、新たな人生を歩みたいと願うようになってゆきました。そうして、物事は展開してゆきました。私は、ドロップアウトした子たちが通うスクールに通うことになったのです。１８歳の初夏でした。

　そのスクールに通ったことは、当時の私にとっては大正解だったと、今になってふりかえるとそう思えます。そこには、まっすぐなレールにのって歩んできた子なんて１人もおらず、みんなちょっとワケありな人生を歩んできた子ばかりがいたのです。両親共に東大卒なのに、本人はなぜか超ヤンキーで非行に走ってしまった女の子とも仲良くなりました。両親が離婚して、実父と継母と義理の弟と同居するようになってから家に居場所がなくなり、心の隙に悪い大人につけいられ、妊娠までさせられて中絶することとなり、裁判で証言しなければならなくなった女の子とも仲良くなりました。中学

生の頃からシンナーを吸うようになり、シンナー遊びをするうちに、幻覚をみた悪友にナイフで刺されてしまった男の子とも仲良くなりました。もしかしたら、私たちはみんな「悪い子」というくくりに入っていたのかもしれません。でも、私はそんな子たちと一緒にいることで、なぜかとても癒されたのでした。人は誰でも悩みを抱えて生きているのだという、普遍的な事実に辿りつくことすらできたのでした。どんな哲学書より心理学書より学びが深かったかもしれません。また、たくさんの大人たちと仲良くなれたことも、私の人生にとってはプラスに働いたような気がいたします。有名テニスプレーヤーのＥさんとも仲良くなり、彼女には恋愛の相談にものっていただきました。恋愛にも学業にも仕事にも、全力でとりくむことを教えてくださったのはＥさんでした。なかなかお会いできずにおりますが、今でも大変感謝しております。若かった私は、恋に恋する乙女のような生活も送っていましたが、心はいつも「姉」のことが占拠しているのも事実でした。ちなみに私は、姉が亡くなってから十年間は彼女については一言もふれないまま過ごしました。それだけ、受けとめるには時間が必要だったということでしょう。

負けず嫌いの私は、高校卒業の資格を取得した後は、１年間のカナダ留学を経て、帰国後は英会話講師として働きながら大学卒業と教員免許取得をいたしました。その後、公立学校の教員をしながら大学院入学の準備を進め、修士課程を修了することもできました。私は、２１歳のときに父が病死したこともあり、どこか一家の大黒柱のような気持ちでがむしゃらに働いてきたようなところがありました。私生活では、２４歳のときに結婚もしておりますから、女

性として幸せな生活を送ってはいるのです。しかしながら、心のどこかで何かを置き忘れているような気持ちもありました。それに気付いたのは、修士論文を執筆するために面会を重ねたフリースクールの方々との出会いを通してでした。その過程で、私はやりたい仕事がより明確になっていったような気がいたします。私は、やはり姉の命を救ってあげることができなかったという自責の念を抱いたままで、その気持ちを「後悔」というかたちで終わらせてしまってよいのだろうか、という思いにいたっていました。そして、後悔ではなく「昇華」させて、これからの人生を歩んでゆくことができるならばどんなによいでしょう、という気持ちになっておりました。姉の命を救ってあげることはできなかったけれど、これからの人生で、悩みを抱える若い方々の気持ちに寄り添うことができたのならば私はそんなに救われるでしょう、という思いにいたったのです。しかしながら、そもそも私は人様を絶望の淵から救い出すことなど、自分ごときにはできないことだと分かっているのです。私は、とりもなおさず自分自身を救済するために行動しているにすぎない、そう思っております。

　そうこうしている間に、私共夫婦のもとに小さくて可愛い赤ちゃんがやってきてくれました。それも、３人も。私も気付けば、３児の母になっていたのでした。そうして、ちょうど３人目の赤ちゃんがお腹の中にいるときに、私共夫婦は静かに決意しました。

　「悩みを抱えた若者の気持ちに寄り添うような仕事をしてゆきたい」

そんな願いのもと、私共夫婦は２００９年春に「赤井川塾」を設立するに至りました。

赤井川塾の設立（２００９年～２０１０年）

「赤井川塾」という名称には、私共夫婦のさまざまな想いが込められております。私共夫婦は、まるで４人目の赤ちゃんの名前を考えるかのように、ああでもない、こうでもない、と話し合いながら「赤井川塾」という名称を定めました。ですから、私共にとって赤井川塾は、まるで子どものような存在ともいえ、小さくて無名ながらも愛おしいものであります。２００９年春によちよち歩きを始めた私共は、これまでに数々の失敗を重ねてまいりました。設立当時、おびただしい数のパンフレットを作成して配布したものの、結果はトホホだったというのそのひとつです。そのために、これではマズイと思った私は、少しでも注目していただくべく、絵本の朗読やピアノの演奏活動もはじめました。私共は、赤井川塾の設立当時に、大変多くの方々から物心両面のご支援をいただきました。大学時代の恩師で著名な音楽家として知られるＫ先生からは、ダンボールいっぱいの絵本をいただきました。私は、先生のご厚意に応えたいという一心から、絵本の朗読をおこなうことを決意したのでした。最初は小樽市内の喫茶店「海猫屋」さんにて、２０１０年春には「札幌市時計台ホール」でもおこなうことができて、とてもよい経験となっております。私は、姉の遺志を知らずしらずのうちに受け継いでいるのか分かりませんが、２０代の半ばごろから無性にピアノが弾きたくなってゆきました。そして、ドイツ留学の経験もある音大講師のＹ先生にも巡り会うことができて、美しく繊細なピアノの音色について、クラッシックピアノの奥深さについて教授いただきま

した。大好きな絵本とピアノを融合させて、私はしだいに「絵本の朗読とピアノ挿入曲の演奏」というスタイルをとるようになりました。この活動は、子どもたちの成長とともに少しずつ増やしてゆきたいと、今から楽しみにしているところです。また、「命の大切さ」を伝え合う授業もはじめました。近年のニュースで、乳幼児の虐待による死亡や、小・中学生のいじめを苦にした自殺などには大変心を痛めております。やはり、「命」にこだわりをもってゆきたいのです。我が国では年間３万人を超える人が自死しているのです。私は、姉を亡くした遺族として、できることを地道につづけてゆきたいと考えております。

赤井川塾の活動として、未熟な私共夫婦にとって大変よい勉強になった出来事もありました。隣町にあたります余市町にあります全国的にも有名な若者自立支援施設のＡご夫妻と教育活動をさせていただいたことです。こちらのロッジ「森のテラス」を寄宿舎として活用して、２０１１年春からの半年間、全国各地から集った若者８名の成長にスタッフとしてたずさわれたことは、本当によい経験になりました。寝食を共にした活動は多忙を極めるものとなりましたが、私共夫婦の理想とした教育活動を、ベテランご夫妻のもとで経験できましたことは、大きな財産となり感謝しております。マザーテレサのようなＴ先生とエネルギッシュなＨ先生には、いつまでも変わらずお元気でいていただきたいと思っております。若者のために人生を捧げきっておられるお２人を心から尊敬しております。

このエッセーを執筆している間にも、痛ましい「いじめ」のニュースが日々報道されております。やはり、いじめは悪いのだと、親

も教師も子どもに教えつづけなければなりません。間違っても、いじめが正当化されるようなおそろしい世の中になってはならないのです。大切な人の命の重さは、どのくらいでしょうか。そう考えるときに、私たちは命の重みを再認識できるのでしょうか。私は、子どもや若者たちと、どうしたら「命の大切さ」を学び合えるかを模索しております。それは、私にはそうする責任があるからだと考えております。絶望的な気持ちを抱えたまま亡くなってゆく子どもや若者を、これ以上増やしたくないのです。愛する人に自死される無念さを、これ以上誰にも味わってほしくないのです。近年は、過剰なまでの競争社会であるために、他者のことを思いやるゆとりがないような、そんな風潮も危惧しております。私の知人も、「自殺」について、

「自殺する人のことなど考えている暇はない。そんなことを考えている暇があったら、自分がやりたいことをした方がいい」

と申しておりました。私にとってはカルチャーショックを受けたような言葉だったのですが、社会には、自殺してゆく人には何の関心もない人々がいるのも事実なのでしょう。そうであるならば、やはり「いじめ」について「自殺」について、問題意識を抱いている人間が社会のセーフティーネットをつくる必要があると思うにいったのです。私は、そうした小さな「気付き」を通して、やがて「政治」というものに興味をもつようになってゆきました。すなわち、個人の力には限界があるゆえに、社会の制度でセーフティーネットをつくることに意義があるのではないか、と思うにいたったのです。例えば、「命の電話」などの地道なボランティア活動も大切であると同様に、「生活保護」などの制度で支える仕組みづくりも大切な

のではないか。だとしたら、私もそうした制度づくりにたずさわりたい、そんな気持ちを抱くようになったのでした。

赤井川村議会議員生活のはじまり（２０１１年～現在）

　２０１１年春、私の赤井川村議会議員としての生活がスタートいたしました。周囲の方々は、いささか唐突に思われたかもしれません。かくいう、私自身が最も驚いていたのですから。私は、かねてから「教育」に情熱を注いで生きてゆくつもりでおりました。しかしながら、その一方で「政治」に対する関心も大きくなっていたのも事実です。特に、２０１１年３月に発生した「東日本大震災」と「福島第一原発の事故」は、平和を享受することをまったくもって疑問視したことのなかった私とって、衝撃的な出来事となりました。赤井川村は、北海道でただひとつの原子力発電所のある泊村から３０キロ圏内に位置しています。私は、平和そのものと思いこんでいた赤井川村の大地を、これからは自分たちの手で守ってゆかねばならないのだ、という気持ちを抱くようになってゆきました。実のところ、赤井川村議会は１年以上にわたって定例会を傍聴しつづけておりました。そうした日々において、私は議員さん方の一般質問などから、赤井川村がどのようなプロセスを経て形成されてゆくのかを興味深く見守りつづけておりました。しかしながら、まさか私自身が３８歳にして立候補することは、告示の直前まで迷いにまよった決断ではありました。その間、先輩や友人に相談をして、さまざまなアドバイスや支援をいただきました。その結果、やはり立候補しようと決断できたのは、家族の理解と先輩のアドバイス、友人の支援があったからです。かえすがえす、私のような「よそ者」を受け入れてくださった赤井川村の懐の深さには感謝してもしきれな

い気持ちでおります。

　無我夢中でスタートした新人議員生活も、早いもので２年目を迎えております。私の議員人生初となる２０１１年６月の定例会では、「泊原発」をめぐる意見書も提出されていたために多数の傍聴者がいらして、非常に関心の高い定例会となりました。２０１２年６月の定例会においても、「観光拠点施設」をめぐる署名が提出されていたために多数の傍聴者がいらして、またしても関心の高い定例会でした。議員生活では悩むこともありますが、私は住民の皆様の願いや想いを届けるメッセンジャーとして真摯に歩んでゆく、そのことにつきると信じております。赤井川村は小さな村ではありますが、本当に熱い村であると日々感じております。住民の皆様が村のことを語られる様子は、まるで我が子を語るがごとく熱いものがあります。私は、頭がクラクラしながらも、皆様のご意見をしっかりと脳裏にやきつける日々を過ごしております。未熟者ではありますが、皆様に育てていただきながら、少しずつでも前進してゆけるように歩んでゆきたいです。

赤井川村政について（現在～未来）

私は、あまたの情報があふれ価値観が多様化する現代社会において、これからも使命をまっとうするべく皆様とともに歩んでゆきたいと考えております。以下に、政策として、いくつかの観点から記します。

「農業について」

赤井川村の農業は、カルデラの気候を生かして多種の野菜や果物、米、花などが生産されていることが特徴的です。酪農も盛んで、牛乳や、アイスクリームやバターなどの加工品も人気です。その他、養鶏や養豚も行われており、のどかな景色が広がります。近年ではＴＰＰなどの問題も考慮されますが、日本の「命」を育む北海道の「農業」を守ってゆくことを目指してゆきます。

「観光について」

赤井川村は基幹産業が農業であると同時に、全国有数のスキーリゾートもあります「キロロリゾート」があることでも知られ、年間通して多数の観光客が国内外から訪れます。私は、「日本で最も美しい村連合」にも加盟している赤井川村の魅力を一人でも多くの方々に知っていただき、国内外からより多くの観光客が訪れることを目指してゆきます。そのために、私もささやかな音楽活動として「赤井川のうた」というオリジナルソングをピアノで弾き語りするなど、観光振興に努めております。

「教育について」

赤井川村は人口が１２００人弱の小さな村ですが、保育所が２カ所、小学校が２校、中学校が１校あります。どこも家庭的な雰囲気で、子ども達はのびのびと成長しているところが魅力だと思います。近年の全国的なニュースでは「いじめ問題」なども挙げられていますが、子どもは社会のみんなで守ってゆく「宝」であります。金子みすずの詩の一節にもあるように「みんなちがって、みんないい」と思えるような環境づくりを目指します。そのために、私もささやかな教育活動として、朗読などのボランティアを行っております。

「福祉について」

高齢社会を迎えるにあたり、健康なシニアライフの促進は重要な要素となってきます。私も、地域のボランティア活動に参加し、高齢者の皆様と簡単で楽しめる運動を行っております。人は皆、誰でもおじいちゃんおばちゃんになるのです。人生の先輩方が暮らしやすく、いずれは自分自身が暮らしやすい社会の実現を目指します。

「エネルギーについて」

赤井川村は、「泊原子力発電所」から３０キロ圏内に位置します。３０キロ圏内の自治体として、「福島第一原子力発電所」の事故を教訓とし、自然エネルギーへの転換を求めます。赤井川村内でも、地熱発電の開発が始まったところです。ＵＰＺの加盟も決定したところですが、みんなの声で安心・安全な社会を築いてゆきます。

抱負（未来）

１、相互扶助による社会を目指して

私が「政治」の世界に興味を抱いたきっかけは、子どもや若者たちに、この国がどのように映っているかが気になったからでもあります。大人よりもピュアな感性をもつ彼・彼女たちに、果たしてこの国はどのように映っているのでしょうか。そう考えますと、少しオソロシクもなりますし、また同時に、何とかしなくては、という責任感も湧いてきます。私が本頁でお伝えしたいメッセージは、そうした彼・彼女らに向けたものでもあります。これからの時代をどのように生きぬいてゆけばよいのか。それを皆様と一緒に考えてゆきたいのです。私のメッセージは、決して完璧なものではありません。むしろ、間違っている箇所もあるかもしれません。私は、そうしたことを前提につたない文章を皆様に読んでいただきたいですし、願わくば、こうしたテーマを題材に皆様とディスカッションできたらよいな、という夢もあります。私は、もっともっと話し合いたい、語り合いたい、そして止揚（アウフヘーベン）するなかで、よりよい社会の在り方を考えてゆきたいのです。さらに願わくば、そうしたことが政治に反映されてゆけばよいな、そんな大きな夢もあります。決してアキラメズにナゲヤリニナラズに歩んでゆきたいから。

２、正社員と終身雇用

私は、１９７２年（昭和４７年）に、神奈川県横浜市で誕生いた

しました。父は、１９３９年（昭和１４年）に宮崎県で誕生し、６人兄弟の５男として、お茶と椎茸を栽培する農家で生まれ育ちました。現在でも、おばと姉が畑を守っており、２人が父の生家で暮らしております。最近では、なかなか訪れる機会もありませんが、幼少期には、毎夏家族そろって宮崎で過ごした想い出があります。そのためか、私は宮崎の方言が好きで、どことなく懐かしく感じたりいたします、余談になりましたが。

さて、私が何を申し上げたいかといいますと、私の幼少期には父の会社が倒産するのではないか、というような不安を抱いたことは、まったくなかったということです。もちろん、その時代においても小さな会社や自営業の家庭において、さまざまなお気持ちを抱えていたかと思いますが、少なくとも私自身は、父が勤める大きな会社が倒産するはずはない！という根拠のない自信のようなものがありました。そして、幼少期にそうした安定感や安心感に包まれて生活できていたことは、今になって振り返ると、なんて有難いことだったのでしょう、と感じられるのです。今の子どもや若者たちは、そうしたことをどのように感じているのでしょうか。私の未熟な体験・経験をもとに考える限り、今の時代はやはり不安定さが否めない気がいたします。そして、そうしたことが子どもや若者たちに与える心理的・精神的な影響について、とても危惧しております。もはや、大学を卒業しても容易に正社員になれない世の中なのです。そうであるならば、現状を乗りきるために、私たち国民もこれまでの価値観や概念を変容してゆく必要があるのかもしれません。すなわち、大学は教養を身につけるために学ぶのもよしとし、よい仕事に就くために学ぶことがすべてではない、と。さらには、正社員に

なれなくても、結婚して子どもをもうけて、というような幸せへの道を歩みはじめてもよい、と。私たちが既存の価値観や概念にガンジガラメになることで、息苦しくなるような閉塞感が漂っているのだとしたら、自分たちが変容してゆくことが生きのびる道ではないか、と。進化するといっても、過言ではないでしょうか。もっと、しなやかにゆるやかに物事を考え、受けとめてゆければ。そのためには、まずは、私たち大人が子どもや若者たちに、こうあるべき、という価値観や概念をおしつけることなく、こうあってもいいんじゃない？というような、新しい価値観や概念を一緒につくり上げてゆく姿勢が求められているのかもしれません。私には、子どもが３人おりますが、彼・彼女たちにも、しなやかにゆるやかに生きぬいていってほしいと願います。そして、私自身も、彼・彼女たちのお手本となるような歩みをしてゆきたいものです。

３、女子よ！貪欲に生きよう

アラフォー女子の私は、ワーキングママとして３人の子どもたちを育てながら働いております。子ぼんのうな夫や、やさしいおばあちゃんやおじいちゃんたちも、家事や育児を支えてくれるのですから、大変恵まれていると思います。そんな私ですが、今に至るまでには、人並みにいろいろと悩んだりもしました。

まずは、結婚。同級生のなかでは、比較的早く結婚することになりました。私が２４歳で、夫が２７歳での結婚でした。私にとって、２４歳で結婚できたことは、精神的にも肉体的にもちょうどよかったと感じております。しかしながら、３１歳で第一子を出産しておりますから、夫婦２人きりの時間がわりと長くありました。私は、

それはそれでとてもよかったと思っております。夫婦で、２人の時間を過ごすなかで、お互いがどのような考え方をもっているのかを知ることができましたし、そうした時間が、子どもたちが誕生したときに生かされたからです。ところで、私がこうしたことを文章にするのには、理由があります。私は４歳年上の姉を亡くして以来、「ロールモデル」となるような年上の女性を求めつづけて生きてきたような気がいたします。幼少期から、姉を模倣するように何でも覚えていった私にとって、姉亡き後の人生は、道なき道をひたすら歩んできたような感覚があります。そのせいでしょうか。私の未熟な体験・経験であっても、子どもや若者たちに役立つようなことがあれば、どんどんシェアしてゆきたいと思うようになりました。札幌の私立高校で、私の「これまで　そして　これからの歩み」についてお話したこともありましたが、そうした機会には、できるだけ失敗談などもお話しするようにしております。なぜなら、子どもや若者たちに、大人が一足飛びに落ち着いたと思ってほしくないからであり、また、大人は決して落ち着いた存在ではないことも知ってほしいからです。さらには、これからの時代は、貪欲な女子とやさしい男子がもっと増えてもよいのではないか、と思うのです。私自身も、女性としての幸せもキャリアも、どちらも享受させて頂いております。そして、そのことは決して大変なことではなく、むしろ相乗効果の上がることだと感じております。女性というのは、ある意味では「逃げ場」がたくさんあるような気がいたします。それは、女性では容認されやすい「家事手伝い」や「主婦」などを、男性が堂々と身分として用いることが一般的ではないことからも明らかでしょう。女性とは、社会的には守られた存在であり、それゆえに

自由度も高いといえるのです。さらにいえば、最近では晩婚化や少子化の傾向もみられますが、いろいろな役割を同時に担う女性がいてもよいと思うのです。妻であり母であり社会人であり学生であり。そんな女性がいても、ステキですよね。こうあらねばならない、というのではなく、どんなことでもチャレンジしてゆけばよい、と。そのようにして、新しい女性像をつくってゆけばよいと思うのです。以下は、私のケースになります。私は、現在は地方議員をさせて頂いております。私の自治体では、唯一の女性議員であり、また、自治体においては２人目の女性議員でもあります。それだけ、議員にはまだまだ女性が少ないということなのですが、私はやはり、男性と同様に女性ももっと意見を反映させやすい社会をつくりたいと願っております。子育てをしながら議員活動をしていて思うことは、子どもたちがいてよかったということです。もちろん、一生独身の女性や、ご縁に恵まれない方、子宝に恵まれない方など、さまざまな女性がいらっしゃると思います。私がお伝えしたいことは、子どもや若者たちには「タイミング」を逃さずに人生を紡いでいってほしい、ということです。人生とは決断の連続です。結婚も出産も、就職と同様に自分からアプローチしてゆくものですし、そうしたことを先伸ばしにしていると、タイミングを逃がした！と後悔する時期がくるかもしれません。ご自身の信念により、生涯独身を貫くという女性は、それはそれでご立派な生き方だと思います。しかしながら、なんとなく日々を過ごしていて、気付いたら気力も体力も下降線をたどる時期にきていた！というのでは、たった１度きりの人生が勿体ない気がするのです。人生を、めいいっぱい謳歌しようではありませんか。他者からどう思われるのか、ではなく、自分

はどう思うのか、を大切に生きましょうよ。私も、自分がどう生きたいのか、をいつも自問自答しておりますし、バージョンアップやリセットしたいときには、なるべくすぐに行うようにしております。そのために、私の場合は、自分自身をあらかじめよく知っておくべく、ダイアリーをこまめにつけるようにしております。年始に年間目標を書き込むことは当然のことながら、なるべくこまかい目標設定をすることも行っております。例えば、月単位や週単位で目標をとらえること、日々の目標を明確にすること、など。そうした作業により、私の２４時間・３６５日は、より充実したものになっていると実感しております。ポイントとしては、なるべく「内観」する時間をもつこと、そして、気付いたことは「客観視」できるように「書く」ことが有益だと感じております。自分の人生くらい、自分でデザインしたいですよね。私も、日々を充実させるために、なるべくていねいな時間の過ごし方を心がけておりますし、そうしたことの積み重ねが、よりよい人生につながってゆくのだと実感しております。クオリティーオブライフを、高めてゆきたいものです。

４、男子よ！やさしく生きよう

私には、息子が１人おります。お姉ちゃんと妹にはさまれた彼は、やさしい男の子だと思います。親の欲目もありますが。

「草食系男子」という言葉が流行したり、現代では男女の性別による役割分担があいまいになり、より個性に応じた生き方が認められるようになりました、すなわち、仕事の好きな女子、家事や育児の上手な男子、キャリア思考のママ、家庭的なパパ、など、いわゆる逆転カップルもすこしずつ誕生している様です。私たち夫婦も、

そんな感じでしょうか。子どもたちは、そんな両親をみて、彼・彼女たちなりに日々何かを感じながら価値観を築いている様です。

さて、私は男子はもっと自由に生きてゆけるようになれればよいと思っております。やはり、もともと男子たるもの、という考え方があるせいか、男子が定職につかず家にいること自体が悪であるかのような風潮がありますが、本当にそうなのでしょうか。家にいても、家事や育児や介護を担っている、そのような男子に対して、もっと評価してもよいのではないでしょうか。よいダンナさんイクオール外で働く人、ではなくてもよいのではないでしょうか。さまざまなタイプの男子が出現してくることで、ニートやひきこもりというネガティブなイメージも払拭されてゆくような社会になることを願っております。すなわち、男子が気負わずにパートやアルバイトの仕事につき、社会的にも容認されるような社会であってもよいのではないか、と。これからの日本は、より成熟した社会に向かってゆくことが予想されます。これまでの社会において、男子は過度に「期待」されすぎていたのかもしれません。そのことが、男子をプレッシャーで押しつぶしてしまうようなことになっていたのだとしたら、本末転倒です。もちろん、自立的に生きてゆくことは大切なのですが、そのためのモデルは決して１つではないはずです。ますますステキな男子像が誕生することを願い、私もワクワクドキドキしております。

５、みんなちがって、みんないい

いてもたっても、いられなかった。何かしなくては、という焦燥感にかられて、せきをきったように本頁を書き上げました。したが

って、お粗末な内容になっているかもしれませんが、それもこれも、すべてがアリノママノ今ノワタシの心境であります。私は、これまでもこれからも、そんな私を皆様にみていただきたいと思っております。特に、子どもや若者たちには。そうして、大人だって、こんなにカッコ悪くても一生懸命に今を生きているんだな、と感じてもらえたらうれしいのです。非正規雇用の時代、ニートやひきこもりなど、ネガティブに聞こえるかもしれない言葉もポジティブに変えてゆくしかないのです。大人とて、そのために必死なのです。なぜなら、大人には、次世代を担う子どもや若者たちに、キチンとバトンを渡す責任があるからです。原発、ＴＰＰ、外交問題など、困難な課題が山積しております。それでも、やっぱり分かってほしい、なるべくよいカタチで問題を解決して、バトンを渡そうとしているんだってことを。

これからの時代、私たちに必要とされていることは、根気強く「対話」することではないでしょうか。国内の問題も、そして、外交問題も、私たちは「対話」なくして乗り越えてゆくことはできません。決して「武力」ではないことを、特に子どもや若者たちには伝えたい。

アラフォー女子の私には、まだまだ時間があるようで、それでも、人生の後半戦に突入しているんだという臨場感もあります。それゆえ、今ならできること今日できること明日のためにできることを意識しながら、上質な日々を紡いでゆこうと真剣に取り組んでゆきます。そして、不器用でカッコ悪くても一生懸命に頑張る大人になりたいな、と感じてくれる子どもや若者たちが１人でも多くいてくれるなら、こんなにうれしいことはありません。

おわりに

私は、「これからの世の中を、時代の流れに逆らって生きてゆきたい」という、あまのじゃくな考えをもっております。すなわち、あふれる情報の流入を極力制限して、のんびりゆっくりと生きてゆくことを目指しているわけです。音楽や美術などの芸術でもそうですが、時代を超えて生き残ってゆくものは「本物」のみなのです。とても難しいことのようにも思われますが、普遍性のある生き方とは、シンプルに生きることではないかと思っております。私にとってシンプルな生き方とは、まずは自分自身を大切にすること、家族を大切にすること、友人を大切にすること、ということが大前提となります。そうした土台があってこその社会貢献であり自己実現なわけです。私のような臆病者な人間が、皆様のお陰で議員生活まで送らせていただいていることは、本当に感謝にたえません。

「これまでも、これからも、ワタシはただのワタシ」そんなスタンスで、気負わずに生きてゆきたいと思っております。そんなただのワタシを応援してくださる方々がいることは、本当に心強いことです。私は、幸せ者ですね。

末筆になりましたが、つたない文章におつき合いくださいました皆様に、まずもってお礼を申し上げます。また、校正や印刷などでお世話になった皆様にも感謝を申し上げます。これまでの人生でお世話になった皆様にも。ややシリアスな内容にも触れましたが、私自身は基本的にはのほほんとした性格ゆえに、これからも自然体で生きてゆきます。未熟者ではございますが、これからもご指導・ご

鞭撻・ご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

２０１４年　吉日

２０２０年の「東京オリンピック」では
４８歳の誕生日を迎えている　中村明子

中村明子プロフィール

１９７２年神奈川県横浜市生まれ。
英会話講師や小学校教諭を経て、２０１１年春より赤井川村議会議員として活動中。「赤井川塾」を主宰し、朗読やピアノ演奏などのボランティア活動も行う。
私生活では３児の母でもある。
趣味は海外旅行、ピアノ、英会話・フランス語会話。
http://akaigawa-akiko.at.webry.info/

これまで そして これからの歩み

２０１４年３月１日発行
著者：中村　明子
出版：らんこし作家デビュー・プロジェクト